

“こどもピースサミット 2025”

平和の意見文集



平和の意見発表会

令和7年6月14日（土）

へい わ ちか 平和への誓い

いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。

同じ過ちを繰り返さないために、多くの人々が事実を知る必要があります。

原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。

誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。

涙とともに止まらない、絶望の声。

一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から80年が経つ今、

本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、

直接話を聞く機会は少なくなっています。

どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、

記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。

大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと。

多様性を認め、相手のことを理解しようとする事。

一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、

傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。

周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、

いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。

One voice.

たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。

大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。

あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、

私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上げていきます。

れい わ しちねん
令和7年（2025年）8月6日

こども代表 ひろしま しりつみなみ しょうがっこう
広島市立皆実小学校
ひろしま しりつぎ おんしょうがっこう
広島市立祇園小学校

ねん せきぐち ち えり
6年 関口 千恵璃
ねん さ さ き しゅん
6年 佐々木 駿



も く じ

がっこうめい 学校名	な まえ 名 前	はっ びよう 発 表 テ ー マ	ページ
はくしましょうがっこう 白島小学校	なかもり き いち 中森 幾一	ぼくが ^{かんが} 考える ^{へい わ} 平和について	1
ふくろまちしょうがっこう 袋町小学校	みやまえ たくと 宮前 逞人	こころ ^{へい わ} 心に ^{きず} 平和を築く	3
よしじまひがししょうがっこう 吉島東小学校	こ だま なお 児玉 直	だれ ^{たいせつ} 誰かの ^{そんざい} 大切な存在	5
う し た しんまちしょうがっこう 牛田新町小学校	え さか ゆう 江坂 優	ねが ^{こうどう} 願いを ^{こうどう} 行動に	7
わ せ だ しょうがっこう 早稲田小学校	つづみ い おり 堤 伊緒里	き おく きろく 記憶から ^{きろく} 記録へ	9
う し た しょうがっこう 牛田小学校	わたなべ りん 渡部 凜	じ ぶん 自分に ^{じ ぶん} できることを・・・	11
おお ず しょうがっこう 大州小学校	やま だ も も 山田 百桃	へい わ せ かい 平和な ^{せ かい} 世界をつくるためには	13
みな み しょうがっこう 皆実小学校	せきぐち ち えり 関口 千恵璃	あ の ひ わす あの ^ひ 日を ^{わす} 忘れない	15
みどりまちしょうがっこう 翠町小学校	ふじ た かん た 藤田 幹太	あ す だいいっ ぽ ふ だ 明日への ^{だいいっ ぽ} 第一歩を ^{ふ だ} 踏み出すために	17
おうごんざんしょうがっこう 黄金山小学校	は た の のぞみ 波多野 希	へい わ もと こえ 平和を ^{もと} 求める ^{こえ} 声	19
いのくちしょうがっこう 井口小学校	とよしま は る 豊嶋 杷瑠	ひ ばくしゃ やくそく 被爆者との ^{やくそく} 約束	21
おおまじょうがっこう 大町小学校	おおもり ゆ き 大森 友貴	かな わす わたし こえ 悲しみを ^{わす} 忘れない ^{わたし} 私の ^{こえ} 声でかたりつぐ	23
ぎ おんしょうがっこう 祇園小学校	さ さ き しゅん 佐々木 駿	へい わ みらい ぼく 平和な ^{みらい} 未来のために ^{ぼく} 僕ができること	25
やまもとしょうがっこう 山本小学校	し みず りゅうせい 清水 琉成	な め はな さ へい わ 無くそういじ ^め 芽！ ^{はな さ} 花咲け ^{へい わ} 平和	27
ともみなみしょうがっこう 伴南小学校	たかえ さ つき 鷹家 颯月	ひろしま う わたし 広島に ^う 生まれた ^{わたし} 私は	29
くらかけしょうがっこう 倉掛小学校	なかにし は る と 中西 陽斗	あ の ひ え が お あの ^ひ 日の ^{え が お} 笑顔はどこへいったんじやろう	31
なか の しょうがっこう 中野小学校	にしもと あさ ひ 西元 朝柊	いのち ともしび 命の ^{ともしび} 灯火をつなぐ	33
みどりざしょうがっこう みどり坂小学校	さ とう る い 佐藤 琉彩	ひ ばくしゃ よ なか 被爆者の ^よ いない ^{なか} 世の中で	35
こう ちしょうがっこう 河内小学校	はやし ゆ き な 林 由希菜	つむ 紡いでいく	37
いしうちぎたしょうがっこう 石内北小学校	い とう ゆ づき 伊藤 悠月	ぼくたちに ^{い とう} できること	39



ぼくが^{かんが}考^{へい}える平和について

ひろしま し りつはくしましょうがっこう なかもり き いち
広島市立白島 小 学校 中森 幾一

1 9 4 5 年^{ねん} 8 月^{がつ} 6 日^{い か}、午前^{ご ぜん} 8 時^じ 1 5 分^{ふん}。この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬^{いっしゆん}で約^{やく} 1 4 万人^{まん にん}の人が亡^{ひと}くなりました。

ぼくのおじいちゃんは中学^{ちゅうがく} 2 年生^{ねんせい}の頃^{ころ}、学徒動員^{がく と どういん}の作業^{さ ぎょう} 中^{ちゅう}に広島駅付近^{ひろしまえき ふ きん}で被爆^{ひ ばく}し、そのあとすぐ近く^{ちか}の川^{かわ}に無我夢中^{む が む ちゅう}で飛び込んだという話^{と こ}を父^{はな}から聞^ききました。必死^{ひっし}に生き延び^{い の}ようとしてくれたおじいちゃんのおかげで、ぼくはここにいます。その後^ご、9 4 才^{さい}で亡^なくなるまで長生き^{なが い}してくれました。

ぼくが覚^{おぼ}えているのは、おじいちゃんの腕^{うで}や首^{くび}が赤^{あか}むらさきのよう^{いろ}な色^{いろ}をしていて、どうしてかなと思^{おも}ったことです。だけど、まだ小^{ちい}さかったぼくに、おじいちゃんは原子爆弾^{げん し ばくだん}のことを一言^{ひとこと}も話^{はな}すことはありませんでした。

いま^{いま}は、もう聞^きくことすらできないけれど、想像^{そうぞう}することならできるかもしれない。おじいちゃん^{かん}が感^{かん}じたこと、あの日^ひ見^みた風景^{ふうけい}、傷^{きず}ついた心^{こころ}や体^{からだ}でどうやって家^{いえ}までたどり着^ついたのか。想像^{そうぞう}してみたこととは、どれ^{ちが}も違^きう気がしました。今^{いま}のぼくと二^{ふた}つしか年^{とし}が違^{ちが}わない頃^{ころ}のおじいちゃんを思^{おも}うと胸^{むね}が痛^{いた}くて、戦争^{せんそう}というものに腹^{はら}が立^たって悔^{くや}しくなります。

おじいちゃんがぼくに何^{なに}も話^{はな}さなかったのは、思^{おも}い出^だしたくないほど辛^{つら}かったのだと思^{おも}います。原子爆弾^{げん し ばくだん}は人^{ひと}の心^{こころ}や体^{からだ}、命^{いのち}までも壊^{こわ}し、想像^{そうぞう}しきれないほど恐^{おそ}ろしい爆弾^{ばくだん}です。戦争^{せんそう}さえ無^なければ、おじいちゃんが原子爆弾^{げん し ばくだん}で苦^{くる}

しむ必要^{ひつよう}もありませんでした。

そのことから、戦争^{せんそう}の原因^{げんいん}を考^{かんが}えてみました。自分^{じぶん}に都合^{つごう}が悪い^{わる}という理^り由^{ゆう}で憎^{にく}しみ合^あったり、気^きに入^いらないという理由^{りゆう}で命^{いのち}を軽^{かる}く扱^{あつか}ったり、あの土^と地^ちのた^たくさ^くんの資^し源^{げん}を力^{ちから}ずくで奪^{うば}ってやろうと思^{おも}ったり、あの国^{くに}やあの人^{ひと}々^{びと}は危^{あぶ}ないからという思^{おも}い込^こみで殺^{ころ}し合^あう、というよう^{よう}な恐^{おそ}ろしく、自分^{じぶん}勝手^{かっ}な行^{こう}動^{どう}を抑^{おさ}えきれないことが戦争^{せんそう}につな^つな^ながると思^{おも}います。

今^{いま}も世^せ界^{かい}中^{じゅう}では大人^{おとな}が始^{はじ}めた戦争^{せんそう}のせいで、生^うまれ^まれたばかりの赤^{あか}ちゃんやぼくと同じ^{おな}ようなた^こくさ^{たち}んの子^こども達^{たち}が戦争^{せんそう}の犠^ぎ牲^{せい}になっ^すています。住^すむとこ^ころを追^おわれ、避^ひ難^{なん}して^も食^たべるものも薬^{くすり}すら十^{じゅう}分^{ぶん}にありませ^いん。一^{いち}日^{にち}も早^{はや}くどの戦争^{せんそう}も終^おわっ^もてほし^といと思^{おも}うのに、止^とめることができ^きないぼくは悔^くしさでいっ^{さい}ぱいにな^なります。それでもぼくは、最^{さい}後^ごに何^{なに}がで^かきるのか考^{かんが}えてみま^ました。

ぼくは、憎^{にく}しみや自分^{じぶん}勝手^{かっ}な思^{おも}いから暴^{ぼう}力^{りょく}をふるう人^{ひと}の話^{はなし}に耳^{みみ}を傾^{かたむ}けたいと思^{おも}います。そし^して、両^{りょう}方^{ほう}の良^よいところを見^みつけ、納^な得^{とく}で^きる考^{かんが}えを探^{さが}したいです。ぼくたち一^{ひとり}人^{ひとり}一^{ひとり}人^{ひとり}が自分^{じぶん}のこととして、相^あ手^てに寄^よりそい、思^{おも}いや^やるこ^ころはな^あに話^{はなし}し合^あうことができれば傷^{きず}ついて悲^{かな}しい思^{おも}いをする人^{ひと}がいなくなるはず^はずです。そうす^すれば、た^たくさ^くんの命^{いのち}を奪^{うば}う戦争^{せんそう}をする必要^{ひつよう}がなくなるのではな^ないのでしょうか。このことを世^せ界^{かい}中^{じゅう}の人^{ひと}々^{びと}に分^わかっ^かてほし^しいです。

ど^どんな人^{ひと}も同^{おな}じ人^{にん}間^{げん}だから。



こころ へい わ きず 心 に平和を築く

ひろしま し りつふくろまちしょうがっこう みやまえ たく と
広島市立 袋町小 学校 宮前 逞人

とっこうたい ふんせん さ
「特攻隊の奮戦、アメリカにとどめ刺す。」

おに さ ふ じ ゆう う か
「アメリカ鬼にとどめを刺すまで、どんな不自由にも打ち勝つ。」

しんぶん き じ けいさい もりもとたかし にっ き もりもと
これは新聞記事に掲載されていた、森本 隆 さんの日記です。森本さんは、
せんそう い とう にっ き せん じ ちゅう せいかつ か ぞく か
戦争に行ったお父さんにあてて、日記に戦時 中 の生活や、家族のことを書い
ていたそうです。僕は日記を読んで、森本さんを怖い人だと思ったけど、読み
すす ます あさ ね ぼう ひる な す や いもうと よろこ
進めると、「朝寝坊した。」や、「昼に茄子を焼いたら 妹 が喜んだ。」といっ
た穏やかな生活も書かれていたので、戦時 中 の子どもも、優しい 心 をもって
いたんだなと思って安心しました。戦争は、そんな子どもたちの 心 まで、相
て ひと おも かんが そ おも せんそう こわ あらた かん
手を人と思わない 考 えに染めてしまうと思うと、戦争の怖さを改めて感じ
ました。

ねんまえ りゅうこう とき ぼく とつとりけんよな ご し す
5年前、コロナウイルスが 流 行していた時に、僕は鳥取県米子市に住んで
いました。鳥取県は、他県と比べて、コロナの感染者数が少なかったのも、県
がい かんこうきやく き
外からたくさんの観光 客 が来ていました。

とき おとな けんがい くるま む かえ
ある時、大人たちが、県外ナンバーの 車 に向かって、「帰れ！ コロナをも
ってくるな！」と、大声で叫んでいるのを見て 驚 きました。学校の友達も、
いし な い ぼく おも
「石を投げてもいい。」と言っていて、僕は「それはいけない。」と思ったけど、
なに い
何も言えませんでした。

ひろしま き せんそう まな き かい ふ へい わ がくしゅう かん
広島に来て、戦争について学ぶ機会が増えました。平和学 習 をして感じた

のは、戦争中は、間違っていることを、間違っていると言えない社会になる
ということです。そして、人の心の平和まで奪ってしまう。それが戦争です。
でも、鳥取でコロナを経験したことで、それは、現代でも起こるのかもしれない。
い。そう思い、怖くなりました。

広島に原子爆弾が投下されて80年経ったけれど、今でもテレビやインター
ネットなどで、間違っていると思えることが、大きな声で発信されることが
あります。それによって、いつの間にか心の平和が奪われる社会になってい
ないでしょうか。僕一人の力では戦争を止めることはできません。けれど、
一人一人が日頃から心を穏やかに保ち、人との関わりを大切に生きることが
できれば、社会の平和を築くことができると思います。

「平和の反対は、何だと思いますか。平和への無関心ではないでしょうか。」
平和学習講座で、講師の桂幾子さんにこう問いかけられ、僕はどきっとし
ました。平和の反対は戦争だと思ったからです。でも、桂さんの言葉をきっ
かけに、もしかしてそうなのかもしれないと思い始めました。

鳥取で、友達に「やめた方がいい。」と思っていながら、言えなかった僕は、
無関心と同じだったかもしれません。間違っていると思えることに対して、
心で思っても、誰も言わない無関心な社会になってしまったら、また戦争は
起こるかもしれません。戦争は、大切な人や故郷、そして人を思いやる心ま
で奪ってしまいます。二度と同じ過ちを繰り返さないために、そして人の心
の平和が奪われないように、平和について自分事として考え、間違ったこと
には間違っていると言える自分でありたいです。



だれ たいせつ そんなに 誰かの大切な存在

ひろしま し りつよし まひがししょうがっこう こ だま なお
広島市立吉島 東 小 学校 児玉 直

ぼく すうねん ひと いのち じんせい かんが おお
僕は、ここ数年、人の 命 や人生について 考 えることが多くなってきました。
す。

ぼく そ ふ じゃくねんせい そ ふ こうくうかんせいかん わか
僕の祖父は、若 年性アルツハイマーです。祖父は航空管制官でした。若い
ころ ころ し ごと いま じ よ か
頃からしていた仕事ができなくなりました。今では、字の読み書きができません。
かんたん こと ば わす な おこ あし いた
ん。簡単な言葉を忘れたり、わけもなくよく泣いたり怒ったりします。足を痛
がったり転んだりもします。祖父は、無線や飛行機が大好きでした。きっと仕
ごと ほこ も あ まえ
事に誇りを持っていたことでしょう。当たり前前にできていたことが、どんどん
で き こた で ぼく か ぞく そ ふ のこ
出来なくなってしまう。いつも答えは出ないけど、僕たち家族は、祖父の残り
の人生を少しでも良いものにしたいと思っています。

そ ふ かんざきしょうがっこう ひ ぼく はは も ねん がつむいか ひろしま はなし
祖父は、神崎 小 学校で被爆した母を持ち、1945年8月6日の広島の話
を、 おきな ころ ぼく ひ そう そ ぼ はや
幼い頃から僕によくしてくれました。その日、曾祖母は、いつもより早
く家を出たため、早く学校に着いたそうです。靴を履き替えている時に、原子
い え で はや がっこう つ くつ は か とき げん し
爆弾が投下されました。その時にとっさに両目を両手でふさいで、靴箱の前
げんばくしやう とう か とき りやうめ りやうて くつばこ まえ
にしゃがみこんだそうです。原子爆弾投下直 後、死の放射能が街を汚染して
げん し ばくだんとう か ちやく ご し ほうしゃのう まち お せん
いるとも知らず、自宅の様子が気になり、学校から外に出ってしまった友人達は
げんばくしやう わか な ひ ばくちやくご たいちょう へん か
原爆 症 により、若くして亡くなったそうです。被爆 直 後は体調に変化はな
くても、とつぜん からだ かん め み きょうれつ いた
突然、身体にだるさを感じたり、目が見えなくなったり、強 烈な痛
みを感じながら 命 を落とす人が多かったそうです。原爆 症 はとても恐ろし
いとおもいました。自分にとって大切な存在が、何の罪もない人達が、苦しみな
おも じ ぶん たいせつ そんなに なん つみ ひとたち くる
がら死んでしまう。たとえ、命 が助かったとしても、曾祖母の 心 の中に一生
し いのち たす そう そ ぼ こころ なか いっしょう
消えない大きな傷を残してしまいました。核兵器の恐ろしさについて、

ひとりひとり じんせい かんが
一人一人の人生について 考 えさせられました。

ち きゅう み ぼくたち そんな いにげん
地 球 から見れば、僕達は、とてもちっぽけな存在です。しかし、人間
ひとりひとり
一人一人には、ささいでも歴史を持っているということです。僕がこの先、
いっしょう で あ ひと ちが ひと だれ たいせつ そんな い う
一 生 出 会 う ことのない人も、すれ違うだけの人も、誰かの大切な存在で、生
まれた時から世話をしてもらい、危ないところから守ってもらい、たくさんの
しんぱい そだ き たいせつ いのち せんそう
心配をされながら、育てられて来たのでしょうか。そんな大切な 命 がなぜ戦争
によって 奪 われなければいけないのでしょうか。 領 土 拡大や経済政策など
いろいろ もんだい はじ せんそう だれ きず ざんぎやく いのち うば
色々な問題で始まってしまう戦争ですが、誰かを傷つけたり、残 虐 に 命 を奪
ったりする権利など、そもそもどこにも存在しないのです。

せんそう ころ にほん せんそう ひ てい い
戦争をしていた頃の日本は、戦争を否定するようなことは言っではいけな
かったそうです。その時代を容赦なく受け入れなければならなかったのです。
くや くる つら むね おも げんだい にほん
悔しく、苦しく、辛さで胸がいっぱいだったと思います。しかし、現代の日本
は、ひとりひとり じぶん かんが はっしん
は、一人一人が自分の 考 えを発信することができます。

おとな ひとたち へい わ
これから大人になっていく人達が平和のためにしなくてはいけないこと。
せんそう げん し ばくだん けいけん かたがた ふう か
それは、戦争や原子爆弾を経験した方々のメッセージを風化させないように
かた つ くる つら き おく ひろしま
語り継いでいくこと。そして、どんなに苦しく辛い記憶があったとしても広島
を復興に 導 いて下さった方々に感謝の気持ちを持ち、敬意をはらうべきだと
おも せんそう し ぼくたち せ だい ひろしま ながさき へい わ き ねん しりょうかん おとず
思います。戦争を知らない僕達の世代が、広島、長崎の平和記念資 料 館 を 訪
れたり、平和学 習 を積極 的にしたりすることとても大切だと思ひます。

わす おそ かな ににげん げん し
忘れてしまうということは、とても恐ろしく悲しいことです。人間は、原子
ばくだん とう か せんそう ぜったい く かえ
爆弾の投下を、戦争を、絶対に繰り返してはならないのです。

ひと れきし つ いち ど じんせい せんそう ぶりよく
人には、歴史が詰まっている。一度しかない人生を、戦争や武力 によって
おびや たいせつ ひと うば くる つづ ひと せ かいじゅう
脅 かされ、大切な人を奪われたまま苦しみ続ける人が世界中 にはまだいる
ということをおは、絶対に忘れてはいけないと思ひます。



ねが こうどう
願いを行動に

ひろしま しりつうし た しんまちしょうがっこう えさか ゆう
広島市立牛田新町小学校 江坂 優

“I thought that Japan dropped the bomb on America!”

わたし かよ しょうがっこう ともだち い こと ば いま
これは私がアメリカで通っていた小学校の友達と言った言葉です。今で
けつ わす ともだち に ほん げん し ばくだん
も決して忘れることはありません。その友達は日本がアメリカに原子爆弾を
お おも わたし き とき ほんとう
落としたと思っていたのです。私はこれを聞いた時、本当におどろきました。
わたし ちち し ごと つ ごう ねんかん せいかつ げん ち しょうがっこう かよ
私は父の仕事の都合で、5年間アメリカで生活をし、現地の小学校に通い
ました。 わたし かよ ねんかん げん し ばくだん まな わ だい
私が通った5年間では、原子爆弾について学ぶことも話題になるこ
ともありませんでした。だから知らない子どもたちがいるのも当然かもしれ
ません。 ひろしま う わたし へい わ き ねんこうえん げんばく
広島で生まれた私にとっては、これまで平和記念公園や原爆ドーム
をおとずれ、 へい わ かんが き かい わたし せ かいじゅう
平和について考える機会がたくさんありました。私は世界中
ひとびと げん し ばくだん とうぜん し おも に ほん
の人々が原子爆弾について当然知っていると思っていました。しかし、日本か
らとお はなれたアメリカ、すく わたし み ちか こ し
遠くはなれたアメリカ、少なくとも私の身近にいた子どもたちは知らなか
ったのです。 ひろしま お げん し ばくだん わたし おな せ だい こ し
広島に落ちた原子爆弾は、私たちと同じ世代の子どもでも知る
べきことだと ころ おも
心から思いました。

けいけん わたし せ かいじゅう おお ひと げん し ばくだん
このような経験から、私は世界中のより多くの人たちに原子爆弾につい
て し おも わたし いま じ ぶん なに
て知ってほしいと思いました。そこで私は、今自分には何ができるだろうか
しんけん かんが ねんかん す わたし に ほん ご
と真剣に考えました。5年間アメリカに住んでいた私は日本語はもちろん
えい ご はな わたし ひと つた ちから
英語も話すことができます。私には、たくさんの人に伝える力があるのだ
せ かいじゅう おお ひと わたし おな せ だい げん し ばくだん し
す。世界中のより多くの人に、また私と同じ世代の原子爆弾について知らな

い子どもたちに、広島で何が起きたのか、どれだけのたくさんの人が傷つき、
長い間苦しんだのか、伝えていきたいです。小さな一歩かもしれませんが、
平和を願う気持ちを行動に移していくのです。そうやって過去を忘れずに、次
の世代に伝えていくことが私たちにできることのひとつだと考えました。

アメリカが日本に原子爆弾を落としたことは事実ですが、それは過去の話
です。だから人をにくんではいけません。なぜなら、アメリカをはじめ、他の
国にも素晴らしい人がいっぱいいて、みんな必ず心のどこかには平和を願
う気持ちがあるからです。私がアメリカで過ごしていた時、たくさんの人の
優しさにふれました。みんな心優しく、困った時にはいつでも助けてくれま
した。私が昨年、広島平和記念資料館をおとずれた時も、色々な国から来た
観光客の人を見かけました。どの人も熱心に写真や展示されたものを見てい
ました。それを見た私は、多くの人が平和を願っていることに気づきました。

私は、平和を願う気持ちこそが大事なものだと思います。平和を願い、過
去を忘れずに次の世代に伝えていくのです。1945年8月6日、広島市は大
きな被害を受けました。そのたった一つの爆弾で多くの人の命がうばわれた
ことは絶対に忘れてはいけません。戦争はただの殺し合いであり、殺し合いは
理由があろうと絶対にやってはいけないことだと私は思います。私は昔起
きたことを次の世代に伝えていくことで、忘れずに繰り返すことを防げると
考えます。そのためには、私は今自分ができることを考えるだけでなく、
願いに向かって、行動に移していきたいです。



きおく きろく 記憶から記録へ

ひろしま しりつ わ せ だ しょうがっこう つつみ い お り
広島市立早稲田 小 学校 堤 伊緒里

「やった、これでいっぱいごはんが食べられる。」

これは、昭和20年8月15日の終戦の日を19才でむかえた、私のひいおばあちゃんの言葉です。長崎県に住んでいるひいおばあちゃんは、今年100才になります。私は、戦争の悲惨さを身を持って体験したひいおばあちゃんにインタビューをしました。そこには、私がたびたびテレビや本で知る「戦争」とは少し異なった戦争の実態がありました。

ひいおばあちゃんにとって、戦争はラジオで始まりラジオで終わったと言いました。冒頭のひいおばあちゃんの言葉はラジオの前で正座して「日本の敗北」を知った時の当時19才の女子の本音でした。一方で、兵隊さん達は、くやしなみだを流して聞いていたそうです。実はこの放送の数日前に、ひいおばあちゃんはアメリカの飛行機から大量にまかれたビラを手にしていました。きれいなカラー印刷で、日本人とアメリカ人が笑顔であく手をした物でした。あまりにもきれいなのでビラをたくさん拾って家に持ち帰るとお母さんから、「そんな物はすべて破りすてなさい。」とこっぴどく怒られたそうです。

後で知ったそうですがそのビラには「日本はもうすぐ戦争に負ける。」と書いてあって80年たった今でもその事を忘れられないそうです。「なぜひいおばあちゃんはそう感じたんだろう」と思った私は、もう少しインタビューをしました。

ビラの話から少し遠ざかりますが、ひいおばあちゃんは、学校に行っても勉強をせずに「農作業」と「千人針」をしていたそうです。私はネットで「千人針」を検さくしてみて、おどろきました。「こんな物で弾は防げるわけがないよ。」きっとひいおばあちゃんたちもみんなわかっていて、当時はそれを

くち
口にできずにいたんだと思います。また、戦時中^{せん じ ちゅう}はとにかく物がなかったら
しく、ひいおばあちゃんは農家^{のう か}だけど米^{こめ}が食べられなかったそうで、それは全
て兵隊^{へいたい}に持っていられるからでした。食料^{しょくりょう}以外にも、フライパンやなべ^{ぶつ}、仏
だんの物^{もの}も金物^{かなもの}ならばすべて持っていかれたそうです。それ以外^{い がい}にも真夜中^{ま よ なか}
に畑^{はたけ}の防空^{ぼうくう}ごうから工場^{こうじょう}に落^おとされるしょういだんの光^{ひかり}を見ていたら、
翌朝^{よくあさ}に、町^{まち}で見たおびた^みだしい数^{かず}のやけどの人^{ひと}やけが人の光景^{にん こうけい}がおそろしく
ていまだに忘れ^{わす}られないそうです。

ひいおばあちゃんは、本当^{ほんとう}は学校^{がっこう}の先生^{せんせい}になりたく、それで女学校^{じょがっこう}に行った
のに、勉強^{べんきょう}はできませんでした。それでもあきらめずに勉強^{べんきょう}をして、先生^{せんせい}の
資格^{しかく}はとりましたが、戦時中^{せん じ ちゅう}に病氣^{びょうき}になったお母^{かあ}さんや、幼い姪^{おきな}たちのお
世話^{せ わ}であきらめてしまったそうです。私^{わたし}だったら、「勉強^{べんきょう}しなくていい！」
と、喜^{よろこ}んでしまいそうです。しかし、やりたいことをいつでもでき、学^{まな}ぶこ
とができる今^{いま}の私^{わたし}は、めぐまれているということに気^き付^づきました。

テレビでは、ウクライナ・ロシア戦争^{せんそう}で戦車^{せんしゃ}や爆^{ばく}げきされた建物^{たてもの}の様子^{ようす}や、
子どもたちが傷^{きず}つき病氣^{びょうき}で倒^{たお}れていく様子^{ようす}が毎日映^{まいにちうつ}し出^だされています。それ
を見る度^{み たび}、本当^{ほんとう}に心^{こころ}が痛^{いた}みます。「平和^{へい わ}」とは、普通^{ふ つう}の人々^{ひとびと}の生活^{せいかつ}で「あたり
前^{まえ}があたり前^{まえ}であり続けること^{つづ}」ではないでしょうか。ひいおばあちゃんの
体験^{たいけん}のような「記録^{きろく}に残^{のこ}らない記憶^{きおく}」こそが、これからの「平和^{へい わ}」へのヒント
ではないかと強^{つよ}く思^{おも}うようになりました。

この春^{はる}、6年生^{ねんせい}になり決意^{けつ い}した私^{わたし}は学級代表^{がっきゅうだいひょう}に手をあげました。これか
ら一年^{いちねん}、平和都市広島^{へい わ と し ひろしま}に生きる6年生^{ねんせい}として、身のまわりの小^みさなことを自分^{じ ぶん}
から進^{すす}んで行^{こうどう}動^{おも}したいと思ったからです。「平和^{へい わ}」な世界^{せ かい}を実現^{じつげん}するためにこ
の事^{こと}を少^{すこ}しでも多^{おほ}くの人^{ひと}に伝^{つた}え、「記録^{きろく}に残^{のこ}す」ことをがんばりたいです。ク
ラスの友達^{ともだち}や世界^{せ かい}の人々^{ひとびと}と「あたり前^{まえ}」についてたくさん話^{はなし}をしていきたい
です。



じぶん
自分にできることを…

ひろしま しりつうした しょうがっこう わたなべ りん
広島市立牛田 小学校 渡部 凛

あなたは、平和について何か 考えたり、行動をしたりしたことはありますか？「世界平和？自分にできることなんて何もない。」そう思っていますか？以前は、私もそう思っていました。しかし、この思いを変える話を聞いたのです。

ねん がつむいか あさ
1945年8月6日の朝。

「ピカッ、ドーン。」

ひろしま しない おお おと な ひび
広島市内に大きな音が鳴り響きました。その瞬間、目の前は一面真っ暗になり、一瞬で焼け野原になりました。その時、私の曾祖父は、爆心地から約3.2キロメートル先で被爆をしました。すさまじい爆風により、近くにあったどぶ川に吹き飛ばされました。どぶ川のおかげで、曾祖父は無傷ですみましたが、辺り一面、大勢の方々がボロボロの服を着て、大火傷を負っていたそうです。曾祖父は、その日以来、近所にいた人の手伝いなど、自分にできることをできる限りやったそうです。つらい思いをしたけれど、亡くなった方のために一生懸命に頑張ったと聞きました。困っている人を助ける人だったと聞いて、私は曾祖父のことを誇りに思いました。私は、この話を大きくなるまで知りませんでした。平和について勉強をしても、どこか自分とは少し遠い世界の話のような気がしていたのです。

ねんせい せんじつ さ さ き さだ こ きゅうゆう かわの と み こ はなし き
6年生になり、先日、佐々木禎子さんの旧友の川野登美子さんのお話を聞きました。川野さんは、禎子さんが亡くなってから、「さだちゃんに何もでき

なかった、だからせめて何かできることをしたい。」と強く思ったそうです。
それから、慰霊碑を建てるために、二十円ずつ出し合い、作ったビラを配って、平和の子の像を造ることができました。

私は、話を聞いて、曾祖父と川野登美子さんに共通することを見つけました。それは、「行動力」です。6年生の今だから、自分がつらい時に、他の人達のために行動することの難しさが分かります。自分がしんどい時に、周りの人達のために手を差し伸べることの尊さが分かります。この二人のすごさが、私の心に響いてきたのです。二人のおかげで、私は自分の意識や行動を変えることができました。

あなたは、平和について何か考えたり、行動をしたりしたことはありますか？もし、この質問をされたなら、今の私は堂々としてこう答えます。

「私は世界平和のために、外国の方に折り鶴の折り方を教えています。」と。
私は、(折り鶴の折り方を教えることで、外国の人に平和について興味を持ってもらい、たくさんの人に平和について考えてもらいたい。)と思っています。

「世界平和？自分にできることなんて何もない。」そんな悲しいこと思わないでください。人を思いやることは誰にでもできます。人を思いやることで、平和に向かって小さな一歩を踏み出すことで、きっと争いは減っていきます。一人一人が自分にできることをやり遂げ、周りの人のためにほんの少しの「行動」をすることが大切なのです。もう二度と広島歴史を繰り返すことがないように、後世へ平和のバトンを、共に繋いでいきましょう。



へい わ せ かい 平和な世界をつくるためには

ひろしま し りつ おお ず しょうがっこう やま だ も も
広島市立大州 小 学校 山田 百桃

こんなにも、^{へい わ}平和をうったえている人たちがいる。^{ひと}平和を願っている人たちがいる。^{わたし}私は、そんな人たちの^{ひと}願いをかなえてみせたい。^{ねが}多くの^{おお}経験を通して、この^{おも}思いをもちました。

1945年8月6日8時15分、このときを^{ねん}境に^{がつ}広島^{むい}の町は^か多くのものを^じ失いました。^{ふん}建物や人の^{さかい}命^{ひろしま}だけでなく、^{まち}生きていく^{おお}希望^{さかい}さえも^{ひろしま}失ってしまいました。^{おも}私は^{おも}現実^{こころ}に起こったことなのだと思うと^{くる}心が苦しくなります。^{わたし}原子爆弾^{げんじつ}が落ちる^お前の^お広島^{いえ}はたくさん家があり、^{しょうてんがい}商店街^{おお}もにぎわい、多くの^お人たちの^え笑顔^おがありました。そんな^{たの}楽しくにぎやかな^{まち}町が^{げんし}原子爆弾^{ばんく}で無くな^なってしまったと^{かんが}考えると、戦争^{せんそう}は二度と^に起こしてはいけないことだと^{かんが}考えます。

^{わたし}私は、^{ねんせい}5年生になり、^{いちねん}一年を通して、^{へい わ がくしゅう}平和学習^ひをしました。^{ばくたいけんでんしょう}被爆体験^{しや}伝承^{かた}者の方から^{はなし}お話を^き聞いたり、^{そうごうてき}総合的な^{がくしゅう}学習^{じかん}の時間^{にのしま}で^{れきし}似島^{しら}の歴史^しを調べたり^にしました。^{ほん}日本が^{せんそう}戦争^じをしていた時代^{せんそう}、戦争^{かえ}から帰ってきた^{へいたい}兵隊^{しょうどく}を消毒^しするための^し施設^{にのしま}が^{いま}似島^{まな}にありました。^{へい わ がくしゅう}今まで^{せんそう}学んだ^{げんし}平和学習^{ばんく}では、戦争^{だん}や^{とう}原子爆弾^{くら}が^{かな}投下^{れきし}されたあとの^し暗くて^{ひろしま}悲しい^{にの}歴史^ししか^し知り^しませんでした^しが、^{ひろしま}広島^{にの}の^{しま}似島^{ばしょ}という^に場所^{ひと}で、^{かんせんしょう}日本^{いのち}の人々^{まも}が^{ばしょ}感染症^{おどろ}にかからないための^{れきし}命^しを守る^{にのしまれき}場所^しがあ^しった^しことに^し驚^しきました。^しこう^{かた}や^{はなし}って^{はなし}歴史^{はなし}を知^{はなし}ることができたのも、^し似島^し歴史^し資料^し館^しをつ^しく^しった^し人^しが^しいた^しり、^し被爆^し体験^しを^しした^し方^しが^し話^しして^しく^しだ^しさ^しつ^したり、^し平和^しを^し発信^しし^しよう^しと^し行^し動^しして^しいる^し人^しが^しいた^しり^しする^しこと^しで^し私^したち^しは^し学^しぶ^しこと^しが^しでき^します。

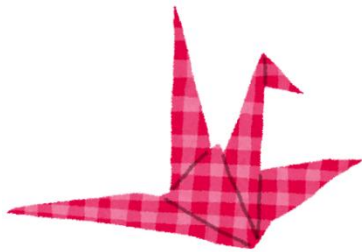
もし、このような人たちがいなかったらどうなるでしょうか。きっと忘れさらられていってしまうでしょう。^む無知^ちはとても^{こわ}怖い^{くら}ことです。^{かな}暗く^ひ悲しく^ひ悲さん

な歴史^{れきし}があったことを伝える人^{つたひと}がいなくなれば、あのときの悲しみ^{かな}を共感^{きょうかん}できず、再び^{ふたたび}過ち^{あやまち}を犯^{おか}してしまうかもしれません。だから、私^{わたし}たちは学び続け^{まなつづ}、自分^{じぶん}の考^{かんが}えを発信^{はっしん}していく。そして、戦争^{せんそう}だけでなく、お互い^{たが}の心^{こころ}が悲し^{かな}んだり傷^{きず}ついたりすることをしてはならないのです。

世^よの中には、小^なさな争^{ちい}いが絶^あえません。どうして起^おきてしまうのでしょうか。それは、お互い^{たが}の意^い見^{けん}を認^みめられなかったり、自分^{じぶん}の思^{おも}いが強^{つよ}く自分^{ただ}が正^{ただ}しいと思^{おも}いこみ、思^{おも}い通^どりにい^きかないと気^きがすまなくなってしまうたりして
いるからではないでしょうか。このような小^{ちい}さな積^つみ重^{かさ}ねがやがて大^{おお}きくな
れば戦争^{せんそう}につながっていくのではないかと私^{わたし}は思^{おも}います。だから私^{わたし}は、身^み近^{ぢか}
にできることを探^{さが}し取^とり組^くんでい^いきたいと考^{かんが}えます。だれに對^{たい}しても分^わけへ
だてなく接^{せつ}してい^いき、明^あ日^{すく}が來^くるのが樂^{たの}しみになるような世^せ界^{かい}にしてい^いきた
いです。

こんなこと^{へいわ}で平^{へい}和^わにつな^つがるわ^わけがな^ないだらうと思^{おも}う人^{ひと}もいるでしょう。
でも、一^{ひとり}人^{ひとり}が現^{げん}状^{じょう}につ^ついて考^{かんが}え、自^じ分^{ぶん}が思^{おも}う平^{へい}和^わの一^{いっ}歩^ぽを踏^ふみ出^だせば、
少^{すこ}しづつ平^{へい}和^わな世^せ界^{かい}へ進^{すす}んでい^いくはずで^す。「自^じ分^{ぶん}さ^さえよ^よけ^ければよ^よい」とい^いう
考^{かんが}え方^{かた}をしては平^{へい}和^わな世^せ界^{かい}はつ^つくれま^ません。自^じ分^{ぶん}のこ^ことしか考^{かんが}えな^ない人^{ひと}ば
かりにな^なってしま^まった^らま^また戦争^{せんそう}を起^おこしてしま^まうかもし^しれま^ません。戦^{せん}後^ご生^い
きぬ^ぬいた人^{ひと}々^{びと}は、町^{まち}や家^{いえ}が無^なくな^なって^も、広^{ひろ}島^{しま}の町^{まち}を復^ふ興^{こう}させよう^と懸^{けん}命^{めい}に
働^{はたら}き、力^{ちから}を合^あわせ、いつかみん^{へい}な^わが平^{へい}和^わで笑^{わら}い合^あえ^る日^ひを想^{そう}像^{ぞう}して一^{いち}日^{にち}一^{いち}日^{にち}
を大^{たい}切^{せつ}に過^すごして^{いた}と思^{おも}い^{ます}。当^{とう}時^じの厳^{きび}しい状^{じょう}況^{きやう}でも相^{あい}手^ての心^{こころ}に寄^よ
そ^どう努^{りょく}力^{りょく}をして^{きた}の^すで^す。そ^おの思^{おも}い^を無^む駄^だに^せず、ま^じずは自^じ分^{ぶん}か^ら行^{こう}動^{どう}
て^みま^しよ^う。相^{あい}手^てを思^{おも}い^やる行^{こう}動^{どう}をして^いき^まし^よう。そ^{そう}う^{する}こ^こと^で
一^{ひとり}人^{ひとり}の^{ちい}小^{こう}さな^{ひろ}行^お動^{ひと}が^{こころ}広^{とど}がり、多^{へい}く^よの^{なか}人^なの^な心^{しん}に届^とき、平^{へい}和^わな世^よの中^{なか}にな^な
て^いく^{しん}と信^{しん}じて。

私^{わたし}は、平^{へい}和^わの一^{いっ}歩^ぽを踏^ふみ出^だせるよ^ような存^{そん}在^{ざい}にな^なり^{たい}。



あの日^ひを忘^{わす}れない

ひろしま しりつみな みしょうがっこう せきぐち ちえり
広島市立皆実小学校 関口 千恵璃

たくさんの人々の人生^{ひとびと じんせい}をこわしたあの日^ひ。あの一発^{いっぱつ}の原子爆弾^{げんしばくだん}がなければ、
今^{いま}も生きていたかもしれない尊^{とうと}い14万人^{まんにん}の命^{いのち}がなくなりました。生きる
権利^{けんり}は、一人一人^{ひとりひとり}平^ひ等^{びようどう}にあるはずなのに、なぜ争^{あらそ}いが起^おきてしまうのでしょ
うか。争^{あらそ}ったあとに、何^{なに}が残^{のこ}るのでしょうか。争^{あらそ}いはなにもうみません。私^{わたし}
は、ものごとを争^{あらそ}うことで解決^{かいけつ}してはいけないと思^{おも}います。

5年生^{ねんせい}のとき、学校^{がっこう}で、生命^{せいめい}のたん生^{じょう}について学^{まな}びました。そのときに聞^き
いた言葉^{ことば}の中^{なか}でも、特^{とく}に印^{いん}象^{しょう}的^{てき}な内容^{ないよう}があります。「一人^{ひとり}の人間^{にんげん}が生まれる確^{かく}
率^{りつ}は、一億円^{いちおくえん}の宝^{たから}くじを百^{ひゃく}万^{まん}回^{かい}連^{れん}続^{ぞく}で当^あてるよりも低^{ひく}い。」というものです。
私^{わたし}は、それを聞^きいて、自分^{じぶん}が今^{いま}、生^いきていることへの喜^{よろこ}びや、命^{いのち}の大^{たい}切^{せつ}さ
を改^{あらた}めて感^{かん}じるとともに、少^{すこ}しおどろきました。せっかくこの世界^{せかい}に生まれ
てくることのできたのに、戦^{せん}争^{そう}は、どうして罪^{つみ}の無^ない人^{ひと}をまきこんでまで、命^{いのち}
をうばいあうのか、ぎもんに思^{おも}ったからです。今^{いま}も、世界^{せかい}には戦^{せん}争^{そう}をしてい
る国^{くに}があります。

3年前^{ねんまえ}、ロシア^{しんりやく}によるウクライナへの侵^{ひろしま}略^{りやく}がはじまり、広島にもたくさん
のウクライナ人^{じん}がひなんしてきました。私^{わたし}は着^きなくなった服^{ふく}を寄^き付^ふしたこと
がきっかけでウクライナ人^{じん}の二^{ふたり}人の姉妹^{しまい}と知^しり合^あいました。私^{わたし}と年^{とし}が近い
二人^{ふたり}は、国^{くに}から出^でることができないお父^{とう}さんを残^{のこ}して、お母^{かあ}さんと三人^{さんにん}で広島^{ひろしま}

に^き来たそうです。自分^{じぶん}だったら、お父^{とう}さんが一日^{いちにち}いなくなるだけでもさみしいのに、何年^{なんねん}も会^あえないなんて、想像^{そうぞう}できませんでした。実際^{じっさい}に、二人^{ふたり}もお父^{とう}さんにと^あても会^あいたが^{こと}っていま^ばした。また、はじめは言葉^{ぶん}のちが^かいや文化^{ぶん}のちが^かいがあるので、仲良^{なかよ}くなれるかどう^{ふあん}か不安^{いっしょ}でした。しかし、一緒^{いっしょ}にたわ^いいない話^{はなし}をし^あたり、おに^{あそ}ごっこなど^{あそ}で遊^{あそ}んだりして^{あそ}いくな^{あそ}なかで、だ^あんだ^あん二人^{ふたり}と分^わかり^あ合^あい、仲良^{なかよ}くな^あっていき^あました。

私^{わたし}は、二人^{ふたり}と遊^{あそ}んで^{あそ}気^きづいた^{あそ}ことがあ^{あそ}ります。それは、生^うまれ^うた^う国^{くに}や話^{はな}す^{はな}言葉^{ことば}が^あちが^あって^あも、ク^あラス^あの友^{とも}達^{だち}と^あ変^かわり^かは^あなく、仲良^{なかよ}くな^あれる^あとい^あうこ^あと^あで^あす。し^あかし^あ世^せ界^{かい}では、国^{くに}と国^{くに}で^あ戦^{せん}争^{そう}が^あ起^おき^あて^あいま^あす。大^お人^とにな^あると、子^こども^あの^あこ^あろ^あに^あで^あき^あて^あいた^あこ^あと^あが^あで^あき^あな^あく^あな^あって^あしま^あう^あので^あし^あょう^あか。そ^あん^あな^あこ^あと^あは^あな^あい^あは^あず^あで^あす。私^{わたし}が、生^うまれ^うた^う国^{くに}の^あち^あが^あう^あ二^ふ人^{たり}と^あ仲^{なか}良^よくな^あれ^あた^あよう^あに、大^お人^とだ^あって^あ国^{くに}の^あち^あが^あう^あ人^{ひと}た^あち^あと^あ分^わか^あり^あ合^あえ^ある^あは^あず^あで^あす。一^{いち}日^{にち}でも^あは^あや^あく^あ戦^{せん}争^{そう}を^あな^あく^あし、私^{わたし}の^あ友^{とも}達^{だち}が^あ家^か族^{ぞく}み^あん^あな^あで^あく^あら^あせ^ある^あ平^{へい}和^わな^あ世^せ界^{かい}を^あつ^あく^あり^あたい^あで^あす。

今^{こと}年^しで、被^ひば^あく^あか^あら^あ80^{ねん}年^たが^あ経^あち^あま^あす。被^ひば^あく^あ者^{しや}の^あ方^か々^{がた}も^あ年^{ねん}々^{ねん}減^へっ^あて^あい^あて、私^{わたし}の^あ家^か族^{ぞく}の^あ中^{なか}で^あ戦^{せん}争^{そう}を^あ体^{たい}験^{けん}し^あて^あいた^あ曾^{そう}祖^そ父^ふと、祖^そ父^ふは^あも^あう^あい^あま^あせん。でも^あ曾^{そう}祖^そ父^ふか^あら^あ戦^{せん}争^{そう}の^あ体^{たい}験^{けん}を^あ聞^きいた^あ父^{ちち}が^あいま^あす。そ^あれ^あを^あ父^{ちち}か^あら^あ聞^きく^あ私^{わたし}が^あいま^あす。あ^あの^あ日^ひの^あ出^で来^き事^{ごと}を^あな^あか^あつ^あた^あこ^あに^あし^あて^あは^あい^あけ^あま^あせん。若^{わか}い^あ私^{わたし}た^あち^あが^あ伝^{つた}え^あて^あい^あく^あこ^あと^あが^あ大^{たい}切^{せつ}で^あす。か^あけ^あが^あえ^あの^あない^あこ^あの^あ命^{いのち}と^あ時^じ間^{かん}を^あ争^{あらそ}い^あで^あは^あなく、平^{へい}和^わの^あた^あめ^あに^あ使^{つか}いま^あし^あょう。



あ す だい いっ ぽ ふ だ
明日への第一歩を踏み出すために

ひろしま し りつ みどり まち しょう がっ こう ふじ た かん た
広島市立 翠町 小学校 藤田 幹太

ぼく ぜん せ かい ひと びと み ら い き ぽ う せん そう げん し ばく だん
僕は、全世界の人々が未来への希望をもてるために、戦争や原子爆弾のおそ
ろしさについてうったえ続けることが大切だと 考 えます。

せ かい いま せん そう な い ら ん つづ くに ち い き かず
この世界では今も戦争や内乱が続いている国や地域があります。その数は
なんと約60か国。その国や地域では「明日死ぬかもしれない」と思っている
ひと たい せつ ひと う し な い ぜつ ぽう ひと
人や、大切な人を失ってしまい、生きることに絶望している人がたくさんい
ます。そういう人たちが約80年前に、たくさんいた国があります。それは僕
たちが住んでいる国、日本です。日本はそのとき330万人以上が亡くなり
ました。その中には、1945年8月6日午前8時15分、広島なかにの空を真っ黒
に染めた原子爆弾で亡くなった人もいます。僕たちの先祖は、おそろしい思い
をしたというのに、日本人の大部分の人は、戦争や原子爆弾のことを客観的
に 見 て い ま す。それはなぜかという、自分自身が体験したことがないから。
ぼく かん が
僕はそう 考 えます。

ひ が し に ほ ん だ い し ん さい は ん し ん あ わ じ だ い し ん さい ひ と な で き ご と
東 日本大震災や阪神淡路大震災などの、たくさんの人が亡くなった出来事
も、今では関心が低くなっています。僕は県外の友達に、「8月6日は何があ
った日？」と聞いてみましたが、「ちょっと分からないかも…」と 答 え ら れ て
しまいました。つまりそのことから、その出来事があった場所ば し ょでしか、あまり
くわしくは教えられないということが分かります。たしかに僕は、東京 大空

襲^{しゅう}についてはあまり知りません。

このように日本人は、色々なことを客観的に見る人が多いけいこうがあります。それなら、戦争や原子爆弾について経験している本人から、話を聞ける最後の世代といわれる僕たちが、バトンを受け取り、次の世代に伝え、客観的な考えの人から、主観的な考えの人になろうと努力するべきではないでしょうか。主観的な考えの人になったら、「わたしたちが世界の争いをなくすためには具体的にどのような行動をすれば良いだろうか。」と考えられます。

僕の曾祖父は満州に行って、中国と戦ったそうです。曾祖母は江田島から、江波へ自分の妹を探しに行き、入市被爆しました。曾祖父母はその時におそろしいものを見ているでしょう。だからでしょうか、曾祖父母は、戦後は全然戦争の話をしなかったそうです。戦争は自分の心の中に残り続けて、生き残ったのはなぜかと、自分を責め続けるのです。

常に「死」ととなり合わせになってしまう戦争はどれだけ人を苦しませるのか、どれだけ人を悲しませるのか。平和都市、広島の人として、被爆四世として、戦争や原子爆弾を経験した本人から話を聞ける最後の世代として、次の世代へ戦争や原子爆弾のおそろしさをうたえ続け、戦争が起こってしまうこと、核兵器をもっている国があることをなくしたいです。世界中の人々が未来への希望をもてるために、すなわち、世界中の人々が明日への第一歩を踏み出すために。



へい わ もと こえ
平和を求める声

ひろしま し りつおうごんざんしょうがっこう は た の のぞみ
広島市立黄金山 小 学校 波多野 希

か ぞく あ つま こ あ
「家族に会いたい。妻や子どもたちに会いたい。」

そんな思いで島根県に歩いて帰ってきた 私 のひいおじいちゃんのお兄さ
ん。その時はまだ、広島県から島根県まで電車が動いておらず、歩いて帰るこ
としかできませんでした。そのため、一 週 間かけて家に帰ったそうです。私
は、どうして歩いてまで家に帰るのか分かりませんでした。しかし、母は、
「じゃあ、自分が戦争に行ったとします。そこで原子爆弾によって被爆したと
します。あなたは最愛の人に会いたいと思わない？」と聞いてきました。
私は母の言葉に、はっとさせられました。もし、私 も人生最後の時が来た
としたら大切な人や好きな人と過ごしたいと思ったからです。そこから少し
ずつ平和の大切さについて 考 え始めました。

しょうがく ねんせい と き ひろしまへい わ き ねん し りょうかん い わたし
小 学 4 年生の時、広島平和記念資 料 館に行きました。私はこわいものが
にが て すこ み おお きず
苦手なので、少しドキドキしていました。そこで見たもの。大きな傷、ケロイ
ドを負った 女 の子。

「かわいそうだな。いた そうだな。」

これがみんなから出てくる言葉でした。しかし 私 は違いました。

「こわい、^{おそ}恐ろしい。^{わたし}私はこんなふうになりたくない。」

そんな言葉しか^{こと}頭^{あたま}の中^{なか}に浮^うかびませんでした。何^{なん}十個^{じつこ}もの^こがい骨^{こつ}が置^おかれて
いる写真^{しゃしん}でも、同じようにこわいと感じ、さらに背^せ中^{なか}にぞっと鳥^{とり}はだ^たが立ち、
その場^ばから逃^にげ出^だしたくなりました。しかし、そこから逃^にげると私^{わたし}が^み見たも
の^なが無^なくなってしまいそう^にで逃^にげることもできませんでした。そんな^き気持^もち
がまざり合^あった状^{じょう}態^{たい}で^み見た「被爆^{ひばく}した三輪車^{さんりんしゃ}やお弁当^{べんとう}、衣服^{いふく}」は、私^{わたし}に^あの
日^ひの^あの^じ時^{かん}間^{げん}に^し原^{げん}子^し爆^{ばく}弾^{だん}が^お落^おとさ^{わす}れた^{つた}ことを^{わす}れては^いけ^ないと^{つた}伝^{つた}えて^{くれ}ま^した。

私^{わたし}は^しま^だ小^{しょう}学^{がく}生^{せい}で、自^じ分^{ぶん}一^ひ人^{ひとり}が^しで^きる^こと^には^{げん}界^{かい}が^ある^ことも^し知^しっ^て
い^ます。そんな私^{わたし}でも^しで^きる^こと、それは、ひいおじいちゃんのお兄^{にい}さん^のの
よう^にに^ひ被^{ばく}爆^{ばく}さ^れた^か方^はの^はお^はな^しを^{こう}後^{せい}世^{せい}に^{つた}伝^{つた}えて^いく^こと^です。私^{わたし}は^{これ}ま^でに
た^くさ^んの^ひ被^{ばく}爆^{ばく}者^{しゃ}の^か方^はから^{せん}戦^{そう}争^{そう}の^はお^はな^しを^き聞^きいて、^おそ^れで^お終^おわ^って^しま^って^いま
し^た。しかし、被爆^{ひばく}者^{しゃ}の^か方^はは^{ねん}年^{ねん}々^{ねん}減^{げん}少^{しょう}して^きて^いま^す。A I が被爆^{ひばく}者^{しゃ}の^か方^はの
^はな^しを^{つた}伝^{つた}える^じ時^{だい}代^くも^く来^くる^そう^です。もちろん^{こう}後^{せい}世^{せい}に^{つた}伝^{つた}えて^いく^ため^には^{ひつ}必^{よう}要^{よう}な
^し手^{しゅ}段^{だん}だ^{おも}思^{おも}い^ます^が、私^{わたし}は^ひ被^{ばく}爆^{ばく}し^てい^なく^{ても}人^{ひと}が^か語^ごり^部と^{して}伝^{つた}える^こと
が^{たい}大^{せつ}切^{せつ}だ^と信^{しん}じて^いま^す。



被爆者との約束

ひろしま し りついのくちしょうがっこう とよしま は る
広島市立井口 小 学校 豊嶋 杷瑠

あなたにとっての「宝物」は何ですか。家族、友達、子ども。いろいろな
答えがあります。その「宝物」が、ある日突然無くなってしまったらどうで
しょう。

8月6日 8時15分、広島に最も恐ろしい爆弾が落とされました。一瞬
にして、広島に住む人々の「宝物」が失われたのです。

ぼくは、2年生の10月に、県外から広島に引っ越してきました。それまで
のぼくは、原子爆弾のことをよく知らずに過ごしてきました。遠い昔に起き
た何か恐ろしい出来事、それがぼくのもっている原子爆弾のイメージでした。

広島に住んでから、ぼくは、原子爆弾のことをたくさん知ることになりまし
た。街が炎に包まれ、がれきの山になったこと。皮ふの垂れ下がった人々が
列になるように川に向かっていったこと。朝が夜のように暗くなったこと。

一瞬ですべてが地獄のようになったこと。原子爆弾で失われたのは、ぼくと
同じように当たり前のように生活をしている人達でした。ぼくと同じように家族や
友達といったそれぞれの「宝物」をもって生活する人達でした。原子爆弾は
一瞬で広島の方々の「宝物」をうばったのです。

それだけではありません。戦争が終わっても、原子爆弾による後遺症の苦
しみが続く、今もその影響に苦しむ人がいるということもぼくが広島に住
み、初めて知ったことでした。

原子爆弾は、遠い昔の出来事ではありません。今もその影のように苦しむ
人がいるのです。それと同時に、世界で起きている戦争では、核兵器のきょう
いが高まっています。原子爆弾の地獄を自分たちの平和な生活とは関係ない

と お むかし お で き ご と かんが いま つづ かくへい き み
遠い 昔に起きた出来事だと 考 えることは、今も続く核兵器のきょういを見
よう とせず に暮らすことと同じではないでしょうか。ぼく自身、もしも、原子
ばく だん し
爆弾のことを知らなかったら、今もこんな風 に 考 えることはなかったでし
う。「知ることが平和を 求 める ことにつながる」これが、ぼくが広島に住んで、
げん し ばく だん し
原子爆弾について知っていくうちに感じたことです。

げん ばく し ぼつしゃ いれい ひ やす ねむ あやま く かえ
原爆死没者慰霊碑には、「安らかに眠ってください 過 ちは繰り返しませ
ぬから」と刻まれています。未来を創るぼく達が、これからも原子爆弾の下で
お きたことについて知ろうとすることをやめず、自分事として 考 えるように
なれば、それは、平和を 求 める ことにつながると思います。それが、慰霊碑に
ねむ かたがた あやま く かえ やくそく
眠る方々との「過 ちを繰り返さない」という約束になるはずです。

げん し ばく だん おそ じっかん かたがた に ど こと お
原子爆弾の恐ろしさを実感した方々は、二度とこのような事が起きないこ
とを願って、思い出すのも苦しい記憶をぼくたちに伝えてくださっています。
ひ ばく ねん むか げん し ばく だん たいけん かた へ なか つた き つぎ
被爆80年を迎え、原子爆弾を体験された方が減る中、伝え聞いたことを次の
せ だい つた かつどう かた こ 子どものぼく達は知る
世代に伝える活動をする方もいらっしゃるそうです。子どものぼく達は知る
ことをやめず、平和を 願 い続けることを忘れずにいたいと思います。

そして、ぼくが平和のために今からできる一歩もあるのだと 考 えしました。
それは、自分とは違う 考 えを認めることです。自分との違いを認め、その違
いを間違っていると 考 えるのではなく、自分のことと同じように、相手のこ
とも 尊 重 すれば、きっとお互いのことをもっとよく知ることができ、争いが
なくなるのだと思うのです。

ぼくの 考 える一歩は、きっと小さい一歩でしょう。でも、それぞれがその
いっ ぽ すす せ かいじゅう ひと いっ ぽ すす へい わ
一歩を進んでいけば、世界中の人がその一歩を進んでいけば、きっと平和に
ちか 近づくのだと思います。核兵器と平和は 共 存できません。ぼくは、今のぼく
にできることをして、「過 ちを繰り返さない」という約束を守っていきたいと
おも
思います。



かな わす わたし こえ
悲しみを忘れない 私 の声でかたりつぐ

ひろしま し りつ おおまちしょうがっこう おおもり ゆ き
広島市立大町 小 学校 大森 友貴

げつげつ か すいもくきんきん
「月月火水木金金」

へい わ ひ び いま わたし こと ば こ おも う と
平和な日々になれた今、私 たちはこの言葉に込められた重みをどう受け止
めるべきでしょうか。

ねん しょう わ ねん がつ む い かげつ よう び ひ ばく しゃ さい
1945年（昭和20年）8月6日月曜日。被爆者である91歳のひいお
ばあちゃんは、その日のことを教えてくれました。

ほんとう いま はな い
「あのね、本当は今でも話したくないんじゃないけど、やっぱ言っておかにはいけ
んと思うんよ。」と。

しょうがっこう ねんせい と き ひ ばく ばくしん ち やく
ひいおばあちゃんは、小 学校6年生の時に被爆しました。爆心地から約2
キロメートル離れた三篠 小 学校の運動 場 で、朝 礼をしていた時でした。背
の 高い ひと かげ いた の こ く び りょううで
の 高い 人の影になったおかげで生き残ったそうですが、首と 両 腕にものすご
いやけどをしました。『三篠の歴史』によれば、児童90人 中 30人が即死だ
ったようです。そして、あの爆弾でひいおばあちゃんのお母さんも、またひい
おじいちゃんのお母さんも、命 を 落としました。

し
なぜ、みんなは死ななければならなかったのでしょうか。

かあ げんばく ひと ねん
「あんたらにはお母さんがおってええね。原爆におうとらん人から『80年
も経ったけえ、もう戦争のことを忘れるよね』なんて言われると、腹が立つん
よ。あの爆弾でお母さんが死んだんよ。私 はね、今でも毎日自分のケロイド
を見よるんよ。お母さんが死んだことと、このやけどが痛かったことは、一瞬

たりとも忘れたことがないねえ。そう言うても、経験しとらんのじゃけえ分からんよね。」

静かに語ってくれたひいおばあちゃんの言葉が胸に突きささりました。私は、ひいおばあちゃんが元気な今のうちに、しっかり話を聞かなければいけない。そして次は私がこのことをみんなに語りついでいきたいと強く思いました。

そこで私は、ひいおばあちゃんの話をもとに、実際に被爆した小学校、その後逃げた川や山を家族と訪れました。その河原で目を閉じると、少しだけ当時のひいおばあちゃんの気持ちが分かった気がしました。私はその足跡を地図にまとめ『悲しみを忘れない かたりつぐ新聞』を作りました。

広島は被爆80年の節目を迎えました。一方で世界のいたるところで戦争が起こっています。私たちは、過去の痛みによりそい、事実目に向ける必要があると思います。

げつげつ か すいもくきんきん
「月月火水木金金」

戦時中は土曜日でも日曜日もなく、人々は国が勝つことを願い、そして国が勝つことを願い、そして国に奉仕し続けていました。しかし、これから未来に生きる私たちは、この言葉を戦争のために努力する言葉ではなく、平和のために動き続ける希望の言葉にしませんか？

私は今、80年前に11歳で被爆したひいおばあちゃんと同じ、11歳です。今の私に出来ることは、ひいおばあちゃんの被爆証言を語りつぐことです。ひいおばあちゃんの声を自分の声で世界の人に伝えていきたいです。



へい わ み ら い ぼ く
平和な未来のために僕ができること

ひろしま し り つ ぎ おんしょうがっこう さ さ き しゅん
広島市立祇園 小 学校 佐々木 駿

Even one voice when spoken with truth and hope , can make a difference
in the world.

たと こと ば こ え しんじつ き ぼう かた せ かい へん か
例えひとつの声でも、真実に希望をこめて語れば、世界に変化をもたらすこ
とができる。この言葉は、ぼくが大切にしている言葉です。僕は2年生の頃か
ら、平和記念公園で、外国から来た方に「ヒロシマ」について語るボランティ
アガイドをしています。

「どうしてあの建物はボロボロなのに、壊されずにそのまま残っているんだ
ろう？」

ちい ころ はじ げんばく み ぼく おも たてもの
小さい頃、初めて原爆ドームを見たとき、僕はそう思いました。あの建物は、
ひろしま たいけん げん し ばくだん おそ いま つた へい わ しょうちょう
広島が体験した原子爆弾の恐ろしさを今に伝える平和の象 徴 だったので
す。戦争や原子爆弾がどれほど恐ろしいものを学びました。焼け野原になっ
た町、必死に助けを求める人々、そして突然日 常 をうばわれた多くの 命 、そ
の ひとつ ひとつ の 出来事が、胸に深く突き刺さりました。

せんそう かくへい き もんだい けつ か こ に ほん
戦争や核兵器の問題は、決して過去のことでも日本だけのことでもありま
せん。今も世界のどこかで 争 いや苦しみが続いています。どうしたら戦争は
なくなるのかと かんが えるようになり、僕は得意な英語をいかして平和記念公園
でボランティアガイドを始めました。

また、祖父から曾祖母が被ばく者だったという 話 を聞き、とても 驚 きまし
た。そんな家族の存在を知ったことで、僕の「伝えたい」という気持ちはさら

つよ
に強くなりました。

じっさい ぼく はなし き なみだ なが がいこくじん
実際に僕の話を聞いて涙を流す外国人がたくさんいました。ある日、僕が
ガイドをした外国人がこう言いました。

かくへい き せんそう ふせ おも きみ はなし き かんが
「核兵器があるから戦争が防げると思っていた。でも、君の話を聞いて考
えが変わった。核兵器はなくすべきだ。」

こと ば き ぼく こえ だれ ところ うご し
その言葉を聞いたとき、僕の声で誰かの心が動くことがあると知りまし
た。たくさんの人が平和について考えるきっかけになる。だからこそ、これ
からも伝え続けたいと思っています。

はじ まえ ぼく へい わ せんそう おも
ガイドを始める前、僕は「平和とは戦争がないこと」だと思っていました。
でも今は、「本当の平和とは、誰もが安全に、そして自分らしく暮らせること」
だと感じています。これはすべての人々が毎日を楽しく、笑って過ごせる世界
のことです。だからこそ、真実を語るとき、明るい未来への希望をこめて、伝
えることを大切にしています。

ぼくひとり ちから ちい つた だれ ところ うご
僕一人の力は小さいかもしれません。でも、伝えることで誰かの心が動
き、その人がまた別の誰かに伝えることで、平和の輪はきっと少しずつ広がっ
ていくと信じています。

ぼく つた つづ せんそう せ かい かくへい き みらい
だから僕はこれからも伝え続けます。戦争のない世界、核兵器のない未来の
ために。

Even one voice when spoken with truth and hope , can make a difference
in the world.

こえ
ぼくは、この「ひとつの声」になれるように、これからも世界に発信し続け
ます。



な め はな さ へい わ 無くそういじ芽！花咲け平和

ひろしま し りつやまとしょうがっこう し みず りゅうせい
広島市立山本 小 学校 清水 琉成

ぼく 僕たちにとって、身近な平和とは何でしょうか。例えば、友達と晴れた空の下、公園で遊び回ったり、家族と一緒に食卓を囲んで美味しいご飯をいっぱい食べたり、教科書とノートを広げて勉強ができた、そうやって色々な人といつも通りを楽しく共有できることが「平和」だと、僕は思います。戦時中だって、今とは違えどもそういう平和があったのでしょうか。そう、あの日までは。

1945年8月6日。悲劇は一瞬にしておとずれました。「ドカーン！」という衝撃音が広島に響き渡りました。狂ったようにあふれる光が包んだ広島町の町は、地獄そのものでした。建物は崩壊し、そこにあったものは全て、容赦なく燃やし尽くされました。少し前までそこに生きていた人々も、あの爆弾を受けたが最後、その姿はまるでお化けだったと当時の方は語っていました。皮膚は焼けただれ、内臓が飛び出ても歩き続け、「水をくれー。水をくれー…。」と唸り、川に飛びこむ人々。この日、この時、この瞬間。彼らの「いつも通り」は、一発の爆弾によって、なにもかも奪われてしまったのです。そして、苦しんだのは原子爆弾で亡くなった人だけではありませんでした。被爆した中で、なんとか生き残ることができた方さえ、今も消えることのない心の傷に苦しんでいるのです。

僕たちは、被爆された川本さんの話を聞いてそう思いました。川本さんのお父さんは、戦争に出るために家族へ「また帰って来るからな。」と伝え、戦場に向かいました。その後、日本は戦争に負けたため、戦場に行っていた他

のお父さん達は次々と帰ってきましたが、川本さんのお父さんは待っても待っても帰って来ることはありませんでした。いつもの様にお父さんの帰りを待っている川本さんの元に、一通の手紙が届きました。そこには、お父さんが戦争で亡くなったという事だけが書かれていました。その時の悲しさは、年をとった今でも忘れることができないと語っていました。この話を聞いて、僕は「戦争はたくさんの何かを失うだけでなく、残った人々の人生まで、心身共に苦しめてしまうというのに、何で人々はここまで戦争にこだわるのだろう。」と思いました。そして、考えました。僕ら人間の中には、自分が何かやられたという事実、やり返す事を「正義」と勘違いして、無意識に自分の正義を通そうとする人がいる。そして、そういう人同士が争うことで戦争につながるのかもしれない。こう考えていくと、平和というのは植物を育てるのに似ているなと感じました。

僕が四年生の時に先生が、「けんかや争いが起きるのは、意見のすれ違いやイライラによって、『いじ芽』が出来るからです。こういう悪い心は全て抜いておきましょう。」とおっしゃっていました。川本さんが「努力しないと平和はおとずれない。」と言われていた様に、人々の悪い心であるいじ芽を抜いて無くそうとしないと、平和という花は咲くことがないんだと思いました。僕は、真摯にいじ芽と向き合ってきれいな平和という花を咲かせたいです。

僕は願い続けます。平和の花が咲くその時を。僕たち一人一人は糸のようなものです。しかし、その糸をより合わせるように僕たち一人一人が力を合わせ、協力し合うことができれば、縄のように強くなるのです。さああなたの力が必要です。みなさんで協力して平和な世界を作っていきましょう。



ひろしま う わたし
広島に生まれた私は

ひろしま し りつともみなみしょうがっこう たかいえ さつき
広島市立伴南小学校 鷹家 颯月

わたし ひろしま う い み なん げん し ばくだん お
私が広島に生まれた意味とは何なのでしょう。原子爆弾が落とされてから
ねん ご わたし ひろしま う しょうがっこう へい わ まな なか
68年後に私は広島に生まれました。小学校で、平和について学ぶ中で、
わたし い み し ぜん かんが
私は、その意味を自然に考えるようになっていました。

ひろしま せんそう ひ さん へい わ たいせつ ひとびと つた もの
広島には、戦争の悲惨さや平和の大切さを人々に伝えようとしている物が
たくさんあります。せんそう ころ がくどう そ かい よう す し ほんかわ
戦争をしていた頃の学童疎開の様子を知ったのは、本川
しょうがっこう し りょうかん けんがく ころ いるい
小学校の資料館を見学したことからでした。その頃のこどもたちは、衣類に
く こ と し ごと まいにち みちばた は や そう た
食い込んだシラミを取ることを仕事にして、毎日、道端に生えた野草を食べて
いたそうです。そんな生活の中、せいかつ なか おや わか く さび うた うた た
そんな生活の中、親と別れて暮らす寂しさを、歌を歌って耐えて
いたそうです。わたし ちい こ つら けいけん
私よりもずっと小さい子どもが、なぜこんな辛い経験をし
なければいけなかったのか、自分ならとても耐えることはできないと悲しく
なりました。また、ひろしまへい わ き ねん し りょうかん げん し ばくだん お とき
広島平和記念資料館では、原子爆弾が落とされた時のま
ちの様子を知りました。よう す し そら ぐろ あかいろ ねっせん ばくふう なに
ちの様子を知りました。空はどす黒い赤色になり、熱線と爆風で、まちは何も
かも溶かされ破壊されました。まちがふつこう なか ほうしやせん えいきょう
まちが復興していく中でも、放射線の影響で
びょう き な かた おお じ ぶん い のこ
病気になり、亡くなった方が多くいます。また、自分だけが生き残ってしま
ったかな ころ きず ひとびと くる じ さつ いのち お ひと
悲しみや心の傷が人々を苦しめ、自殺をして命を落とす人がいたこと
も知りました。

わたし かよ ともみなみしょうがっこう へい わ つた ひ ばくじゅもく に せい さくら
私が通っている伴南小学校にも、平和を伝える被爆樹木二世の桜があ
ります。ひ ばくじゅもく げん し ばくだん た い のこ き つか
被爆樹木とは、原子爆弾に耐え、生き残った木です。その木から接ぎ
木をしていのち つな に せい さくら まいあさ こうないほうそう さくら
命を繋いだのが、この二世の桜です。毎朝、校内放送では、この桜
のうた ことを歌った「ピース～命のバトン～」という曲が流れています。少し悲
しいけれどなん ゆう き き も きょく きょく
何だか勇気がでてくる、そんな気持ちになれる曲です。この曲
は、ともみなみしょうがっこう そつぎょうせい へい わ ねが つく わたし か し へい
伴南小学校の卒業生が、平和を願って作りました。私は歌詞にある「平

わ 和のシンボル」 という ことば 言葉 がすてきだな と思っ ています。

そして 一番 心 を動かされたのは、被爆樹木のことを世界に発信している渡部さんのお話でした。70年は草木も生えないと言われた広島県の焼野原で、被爆樹木は、緑の葉を茂らせ、花を咲かせました。原子爆弾で身体に傷を負い、心に悲しみを負った被爆者の方は、この木を見て励まされ、強く生きていこうという勇気をもったのです。被爆樹木は、言葉をしゃべることはないけれど、その力強く生きていく姿で、平和を愛し、命ある物を大切にすることをみんなに訴えていると思いました。そして、伴南小学校にある被爆桜の二世の木は、そのことを伝えたいという人の思いがつまった木、まさに「平和のシンボル」ということが分かってきたのです。

今、この時にも世界では、戦争で尊い命が奪われています。民族や宗教などの考え方の違いや、資源や領土などの争いによって戦争が起こっています。いつかまた原子爆弾という恐ろしい兵器が使われるかもしれないと思うと、不安な気持ちになります。

どうすれば戦争はなくなるのでしょうか。私は、渡部さんが、被爆樹木を世界に広げる活動をしていることを知り、自分も何か行動したいと思いました。私にできることは二つあると思っています。一つは、戦争の恐ろしさを伝える物を大切に次の世代に引き継ぐこと、そして、自分がその事から学び、考えたことや感じたことを、誰かに伝えていくということです。「ピース～命のバトン～」の曲も、平和をつないでいこう・つたえていこう、と歌っています。二つ目は、笑顔を大切にすることです。平和という言葉から、私は笑顔が浮かんできます。私は、悲しんでいる人がいたら、笑顔で優しく話しかけたいです。笑顔で話すことで相手は安心し、笑顔が広がっていきます。それが、平和につながるのではないのでしょうか。広島に育ち学んだこの二つのことを行動していくこと、これが広島に生まれた私の意味だと思っています。



あの日の笑顔はどこへいったんじやろう

ひろしま しりつくらかけしょうがっこう なかにし はると
広島市立倉掛小学校 中西 陽斗

僕は、友達や家族と遊ぶことが大好きです。

時にはお腹が痛くなるほど笑うこともあります。それは、僕にとっては当然

り前、日常ですが、1945年8月6日、午前8時15分、「ドーン！」一発

の爆弾により広島から当たり前の日常が消えたのです。あの一発の爆弾でど

れだけ広島の平和が失われたのでしょうか。あの日の笑顔はどこに行ってし

まったのでしょうか。

テレビで、原子爆弾が広島に落とされた直後の映像を見たことがあります

す。とても悲惨な映像でぞっとしました。けれども、今も世界で大きな戦争が

実際に起きています。ウクライナとロシアの戦争です。ニュースで道端にたく

さんの遺体があるのを見ました。それは、1945年8月6日、午前8時15

分の時と同じでした。「これが戦争なんだ」と実感しました。世界の平和が壊

れて戦争になるという現実があるということも。

もし、同じことが自分たちの身に起きたらどんなに悲しくて、どんなに苦し

いでしょう。どうしたら戦争や喧嘩がなくなるのでしょうか。どうしたら、世界

の人々が平等に平和な生活が送れるのでしょうか。できることは誰だってあ

るはずです。僕は人の意見を聞き、自分の意見を持つことで世界の人々の行動

が、世界の平和へとつながるのではないだろうかと考えます。

さくねん ざいこうせいだいひょう ねんせい そつぎょうしき さん か こうちょうせんせい しき
昨年、在校生代表として5年生が卒業式に参加したとき、校長先生の式

じ なか つばい はじ し さくねん がつ かくへい き はいぜつ
辞の中で、坪井さんについて初めて知りました。昨年の10月、核兵器廃絶を

ながねんうった つづ かつどう みと にほん ひ だんきょう へい わ しょう おく
長年訴え続けてきた活動が認められ、日本被団協にノーベル平和賞が送ら

れました。その代表委員として長い間支えてこられた方が、坪井先生です。

ぼく しんがく かめざきちゅうがっこう しょだいこうちょうせんせい
僕たちが進学する亀崎中学校の初代校長先生です。

さい とき ひ ぼく にちかんせい し さかい い しき もど い さい
20歳の時に被爆し40日間生死の境をさまよい、意識が戻って言った最

しょ こと ば せんじょう つ い
初の言葉は、「わしらを戦場に連れて行ってくれ。アメリカをやっつけちゃ

る。」でした。戦後、中学校の数学の教師となり、自らの体験を生徒たちに

かた ぼく ゆう き にほん まも ひと
語られていたそうです。僕は、そういう勇気があって、日本を守ろうという人

が、平和の大切さを知っていると思います。「原爆や、戦争の話をするこ

へい わ がくしゅう はなし き おも へい わ がくしゅう つばい
だけ平和学習ではない。その話を聞いてどう思うかが平和学習です。」坪井

のこ こと ば
さんが残された言葉です。

ぼく つばい はなし き おも せ かい へい わ
僕は坪井さんの話を聞いてこう思いました。それは、世界が平和になるた

めには、自分の意見を持つことだと思います。けれど、自分の意見を言うだけ

へい わ おも あいて い けん き たが
では、平和にはならないと思います。相手の意見をしっかりと聞くことでお互い

い けん ちが あゆ よ おも
の意見が違っていても、歩み寄ることができるのではないかと思います。だか

ぼく じ しん がっこう かてい み ちか じぶん い けん ちが
ら、僕自身も、学校や家庭など、身近なところから、自分の意見と違っていて

あいて い けん き おも あいて かんが き も
も、相手の意見をしっかりと聞こうと思います。そして、相手の考えや気持ち

かんが おも ちい いっ ぽ ぼく
も考えてえていきたいと思います。小さな一歩かもしれませんが僕にできる

はじ だいいっ ぽ
始めの第一歩にしたいです。



いのち ともしび
命の灯火をつなぐ

ひろしま しりつなか の しょうがっこう にしもと あさ ひ
広島市立中野小学校 西元 朝柊

「ピカッ」と光った瞬間「ドーン」とすごい音がした。快晴だった朝が一瞬にして暗闇に包まれ、あちこちで炎がバチバチと燃え、まるで地獄のようだった。

僕の曾祖父は、母に、被爆後の「ヒロシマ」の姿をそのように語ったそうです。僕はその話を聞いても今こんなに平和な「ヒロシマ」で、本当にそんなことが起こったのか、信じることができませんでした。

5年生の時、校外学習で広島平和記念資料館に行きました。そこには目を向けていられないような悲惨な状況が描かれていました。僕はこの時、本当に広島に原子爆弾が落ちたのだと実感しました。母にそのことを話すと、「その悲惨な戦争に向き合って、二度と同じことが起きないように伝えていかなければならないね。」と言われました。「ヒロシマに原子爆弾が落ちた」という事実は、僕が広島に生まれ、曾祖父が原子爆弾を体験していることから、決してひとつとではないと感じました。だから僕は「平和」と「戦争」について深く考えるようになりました。

今、僕は毎日平和に暮らしています。友達と遊び、家族とご飯を食べ、自由に感情を表現することもできます。しかし、今も世界のどこかで幾つもの戦争が起きています。このような状況で、本当に平和と言えるのでしょうか？

ある日、戦争について父と話したことがあります。僕が「戦争がなくなれば

へい わ せ かい 平和な世界になるんじゃない？」と言うと父は「兄 弟 げん かも 争 い の 一つだ
としたら、それを無くすにはどうしたらいいと思う？」と返しました。弟 と
のけんかはささいなことがきっかけで起こり、何度も繰り返してしまってい
ます。そう かんが 考えると、争 い は 日 常 の 中 に も あり、無くそうと思ってもなか
なか無くなりません。僕は その 時、戦 争 を 無くすことは簡単ではないことに気
がつかしました。

ぼく へい わ せんそう ぼうりよく 僕は、平和とは戦争や暴力 がないだけでなく、みんなが安心して笑って暮
らせることだと思います。その平和を実現するために、今の僕たちにできるこ
とが2つあります。

1 っ 目 は、「戦 争 」や「原 子 爆 弾 」の悲惨さを学び、語り継ぐことです。今、
ぼく げん し ばくだん 僕たちが原子爆弾のことを知っているのは、う つ つた 受け継いで伝えてくれる人たちが
がいるからです。だからこそ、僕たちも「ヒロシマ」で起きた出来事や「二度
と 同じ ことを繰り返してはいけない」という被爆者の方々の思いを後世につ
ないでいかなければなりません。

2 っ 目 は、思いやりの心を持つことです。いろんな人 と 話 し、お 互 い を 知
ることで、あ い て き も 相手の気持ちを かんが 考 えて 行動 し、は つ げん 発言することができます。そうす
れば あらそ 争 い は 減 り、へい わ 平和につながると思います。

「ヒロシマ」の人たちが 諦 め ずに「命 の 灯 火 」をつないでくれたからこそ、
ぼく いま 僕は今ここにいます。その「命 の 灯 火 」をもらったことに感謝し、これから
も せんそう 戦争 と へい わ 平和について かんが 考 え、つた 伝えていきたいと おも 思います。

あ の 悲 惨 な 「ヒロシマ」を二度と作らないために。



被爆者のいない世の中で

広島市立みどり坂小学校 佐藤 琉彩

広島に原子爆弾が投下されて80年の今、被爆者の方の数も減ってきています。いつかはおとずれる被爆者のいない世界のために、私たちが今、できることは何だと思いますか。

私のそう祖母は、広島に原子爆弾が落とされた時、あの大きなきのこ雲の下にいました。おでこは切れ、流れる血で前が見えず、背中にはガラスが大量にささり、まったく身動きがとれなかったそうです。周りにたおれている人たちはもうなくなっており、長い時間がたった後、「生きとるもんはおらんかあ。」という救助の声が聞こえたそうです。私のそう祖母は、声をふりしぼって応えて助けてもらったそうです。

そう祖母は戦争が終わった54年後になくなりました。この話を母から聞いた私は、これから生まれてくる子どもたちや、世界中の人々にこの話を記おくを受けついでほしい、より多くの人に知ってほしいという考えをもちました。

私には、姉がいます。私の姉は、直接、被爆者の方に話を聞き、記事にまとめて新聞にし、記おくを受けつぐ活動をしています。姉は、「被爆者の方々は、本当はつらくて、8月6日のことは思い出したくないけれど、自分の子どもや孫、その後の世代に自分と同じ経験をさせたくないという思いから、被爆体験を話してくださっている。」と言っていました。

今の世代から次の世代へ記おくを受けつぎ、発信していくことは、戦争が起きないようにする一つの方法だと私は思います。

そもそも、なぜ戦争が起きてしまうのか考えたことはありますか。その理

ゆう おお わ いつ
由は大きく分けて五つあります。

ひと め みんぞく あらそ れきし かんが あらそ
一つ目は、民族の争いです。歴史などがちがうため、考えがことなり、争
いが起こってしまいます。

ふた め しゅうきょう あらそ みんぞく あらそ おな かんが
二つ目は、宗教の争いです。民族の争いと同じように、考えがちがう
ことによって起こってしまいます。

みつ め しげん あらそ きん こうぶつ と あ お
三つ目は、資源の争いです。金などの鉱物の取り合いによって起こってし
まいます。

よっ め せいじ あらそ りょく お
四つ目は、政治の争いです。けん力などのちがいから起きてしまいます。

いつ め りょうど あらそ こっきょうせん お
五つ目は、領土の争いです。国境線がはっきりしないことから起きてし
まいます。

せんそう さまざま り ゆう お
これらのように、戦争は様々な理由から起こってしまいます。では、戦争が
起こらないために、わたし

ひ ばくしゃ せ かい わたし がつ
被爆者のいない世界でも、私たちのできることはたくさんあります。8月
6日のようなことが二度と起こらないようにするために、ひとりひとりが思いや
りをもって、他人の意見を否定するのではなく、その意見をみとめて聞くこと
を大事にすることができれば、自分のやるべきことが分かります。

ひ ばくしゃ せ かい わたし
いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。そんな世界で私たちができる
ことは、身の周りの人や、世界中の人々に、8月6日にあったことをより深
く知ってもらうことです。そのために、へい わ せんそう ばしょ い
り、被爆者の方から話を聞いたりしていきます。

せんそう
戦争はどれだけしてはいけないことなのか。

へい わ たいせつ
平和はどれだけ大切なものなのか。

ねんまえ がつむいか に ど お つた
80年前の8月6日のようなことが二度と起きないために、伝えていくこ
とが大切だと思います。



つむ 紡いでいく

ひろしま しりつ こうちしょうがっこう はやし ゆき な
広島市立河内小学校 林 由希菜

「^{こころ}心に^{あな}穴が^あ開いちゃったの。」

わたし ^{にゅういん}入院しているひいおばあちゃんからの^{ことば}言葉で^{せんそう}戦争に対する^{きも}気持ちが
^{おお}大きく^か変わりました。 ^{わたし}私が^{いちねんせい}まだ一年生のころ、^{げんし}原子爆弾^{ばくだん}について^き聞いたこと
があります。

「^{ばくだん}爆弾が^お落ちた^{とき}時どうだった。」

^{へんじ}その返事は^{わたし}私が^{そうぞう}想像していたよりずっとおそろしいものでした。その^{とき}時
では^{わたし}私は^{げんし}原子爆弾が^{ふつう}普通の^{ばくだん}爆弾だと思^{おも}い込^こんでいました。

「おばあちゃんは^{ちゅうごく}中国^にってところに^{からだ}逃げて^{だいじょうぶ}体は大丈夫^{うち}だけど、^{とも}お家も、^{だち}友
達も、^き消え^{こころ}ちゃった。だからおばあちゃん^{あな}心に^あ穴が^{あな}開い^あちゃったの。穴が
^あ開かないように、^{じぶん}自分も^{ともだち}友達も^{たいせつ}大切にするんだよ。」

^{おきな}幼^{わたし}かった^{わたし}私^{こころ}の心にも^{おお}大きな^{あな}穴が^あ開いた^{かん}ような^{かん}感じがし
たことを^{いま}今でも^{おぼ}覚えています。

^{いぜん}以前、^{わたし}私が^{ひばくしゃ}被爆者の^{かた}方たちの^{はなし}お話を^き聞いているとき、^{はな}話してくださって
^{かた}た方が^{すこ}少し^{なみだめ}涙目になられていたことがありました。 ^{わたし}私は^{おも}思いました。あの^{とき}時
の^{なみだめ}涙目は^{ふつう}普通の^{なみだめ}涙目じゃない。 ^{いろいろ}色々な^{かんじょう}感情の^{なみだ}涙だと。 ^{わたし}私は^{ひいおばあ}ひいおばあ
ちゃんの^{おも}ことを^だ思い出^{いちねんせい}しました。一年生の^{ころ}頃に^{はな}話してくれ^{はな}たとき、^{はな}ひいおばあ
ちゃん^{おも}はどんな^{わたし}思いで^{はな}私に^{かな}話してくれ^{かな}たのか、^{かな}どんなにも^{かな}悲^{かな}しかったのか。

^{いま}今、^{せかい}ウクライナや^{せかい}アフガニスタンなど^{こく}世界では、^{せんそう}59か国も^{せんそう}戦争を^{せんそう}している
のです。戦争が^ふもっと^{せかい}増えると、^{ちきゅう}世界や^{おお}地球にも^{あくえいきょう}大きな^{あた}悪影響^{あた}を与えてしま
います。



ぼくたちにできること

ひろしま しりつしうちきたしょうがっこう いとう ゆづき
広島市立石内北小学校 伊藤 悠月

いま しゅんかん せかい せんそう つづ まいとのおおひと へいわ
今この瞬間も世界では、戦争が続いています。毎年多くの人たちが平和の
たいせつ うった せんそう せかい
大切さを訴えているのに、どうして戦争はなくならないのか。どうして世界
は変わらないのか。そんな思いがずっとぼくの中にあります。ぼくたちが、訴
えていることに意味はあるのだろうか。

さくねんど ひろしまへいわ きねん しりょうかん にゅうかんしやすう か こさいこう まん
しかし、昨年度の広島平和記念資料館の入館者数が過去最高の200万
人に くいけい まんにん み か こさいこう
人をこえ、累計8000万人をこえたというニュースを見ました。過去最高と
なった理由として、G7広島サミットや日本被団協がノーベル平和賞を受
しょう あ み
賞されたことなどが挙げられていました。このニュースを見て、「ぼくたちの
こえ とど しょう かんが
声が届いている証こだ。」と考えました。

ひろしまへいわ きねん しりょうかん けんがく ひばく ひさん し
ぼくは、広島平和記念資料館を見学して、被爆したときの悲惨さを知り、
もう二度と戦争などをやってはいけないと思いました。今のぼくたちには、戦
そう と かくへいき へいわ たいせつ
争を止めることも核兵器をなくすこともできません。しかし、平和の大切さを
まな はっしん
学び、発信していくことはできます。

がっこう こうか つく くだ かじやふみあき ひばくしや ひばく
ぼくの学校の校歌を作って下さった梶矢文昭さんは、被爆者です。その被爆
されたときの恐ろしさや悲惨さを詳しく教えてくださいました。校歌には「は
みらい ひろしま か し かくへいき しょう みたびく かえ
ばたけ未来に広島から」という歌詞があります。「核兵器の使用を三度繰り返
してはならぬ」という話を受けて、ぼくは、平和を願いながら歌います。

そして、その恐ろしさを次の世代に伝えていかなければならないと改めて

おも
思いました。

げん し ばくだん とう か ねん た ひ ばくしゃ すく
原子爆弾が投下されてから、80年が経ちます。被爆者はどんどん少なくな
り、直接話を聞くこともできなくなっていくでしょう。だからこそ、ぼくた
ち広島の子どもには、話は聞いて、その経験や思いを受け継いでいく責任が
あります。

に ほん ひ だんきょうだいひょう た なか じゅしょう みずか ひ さん ひ
日本被団協代表の田中てるみさんは、受賞スピーチで、自らの悲惨な被
爆体験と共に、「核兵器をなくしていくためにどうしたらいいか、世界中のみ
なさんで共に話し合い、求めていただきたいと思います。」と語りました。
ぼくは話を聞いて、平和についてみんなで話し合い共有することの大切さ
を改めて考えました。友達の意見に耳を傾け、違う考えを見付けて「どう
してそうなるのだろう。」と、自分たちで話し合い、答えを探しています。話
し合ってお互いの意見を理解し深め合えることが、田中さんの言う「世界のみ
なさんと共に話し合うこと」だと思います。

ちよくせつせんそう と かくへい き
ぼくには、直接戦争を止めることや核兵器をなくすということはできませ
ん。しかし、学校や自分の身近な場所で平和の大切さを学び、発信していくこ
とはできます。一人また一人とみんながそうしていくことで平和に近付く
のではないのでしょうか。

「ぼくたちにできること」は身近にあります。

みなさんも、共に話し合い、自分にできることや、一歩でも世界の平和につ
ながる努力をしてみませんか。

いっしょ はな あ へいわ もと
一緒に話し合い、平和を求めていきましょう。

Commitment to Peace

August 6, 2025

The day will come when there are no more *hibakusha* left in the world.

In order to avoid repeating the same mistakes, as many people as possible must know the truth of what happened.

Have you ever imagined what it was like on the day the atomic bomb was dropped?

At 8:15 am on August 6, 1945,

the very first atomic bomb in the history of human warfare was dropped on Hiroshima, annihilating in an instant the lives we take for granted.

Imagine: people burned beyond recognition,
unending tears pouring with wails of despair.

A single atomic bomb robbed countless people of their lives and changed the lives of survivors forever.

It has been 80 years since the atomic bombing.

We now have less chances than ever to hear directly from the *hibakusha*

as they speak of memories that are extremely painful; memories they would rather forget.

No matter how much time passes, we cannot allow this tragedy to fade from memory.

The responsibility to record and convey the voices of the *hibakusha* to the next generation falls to us.

Wars are happening right now in places around the world.

There are so many people who have lost loved ones and the will to live.

We should take these facts personally and concern ourselves with peace.

We should be accepting of diversity and work to understand others.

If each of us is considerate of each other's feelings and speaks to one another with compassion,
then there would be no more hurt or sadness.

We believe that the smallest of gestures to those around you
might one day lead to world peace.

One voice.

When spoken with conviction about the facts they learned, even just one voice can make a difference.

It isn't just adults, either. We, the children, also have the ability to take action for peace.

In order to avoid repeating what happened that day, to avoid repeating the history of Hiroshima,
we will build peace by continuing to convey the will of the *hibakusha* and weaving our voices together as one.

Children's representatives:

Sekiguchi Chieri (6th year, Hiroshima City Minami Elementary School)

Sasaki Shun (6th year, Hiroshima City Gion Elementary School)